小説部門総評

久美　沙織

超然文学賞にご応募くださったみなさま、また、この企画に興味をもってくださったみなさま、まことにありがとうございます。

私は久美沙織と申します。大学一年生の夏休みに少女小説誌に応募して短編デビューし、以来およそ四十年、ずっと何かを書いて生きてきました。その間、さまざまな賞にもたずさわり、多くのかたが陥りやすい間違いや誤解を痛感してまいりました。それゆえ、気をつけて欲しいことや、心がけたら良さそうなことについて、おりおり書いたり話したりしてきました。このたび、縁あって、こちらの賞にもかかわることになりました。小説部門の審査委員会で、金沢大学のインサイダーでないのは私ひとりです。責任重大だなと感じております。

ご応募いただきましたすべての原稿に目を通しました。

入賞された作品についての選評は作品と共に公開されますが、そのほかの作品についても、感想や意見を書きました。それらは作者のもとに個々におとどけするよう予定しています。来期以降、応募作があまりにも増えたら、個別対応はできなくなってしまうかもしれません。どうぞおゆるしください。

ここでは、みなさまにぜひご理解いただきたいことについて申し上げます。

まず、「誰に読まれるかを意識して欲しい」ということです。

賞に応募する場合、審査委員や選考委員はたいがい公表されています。まずは、そこを突破しないと、さらに多くのひとの目にふれるところに到達できない一枚目の壁は正体を明かしています。これを活用しない手はありません。受験や面接の心構えと同じ。傾向と対策。敵を知り己を知ればうんぬんです。

超然文学賞の場合、応募者が在校している学校の校長先生の推薦などが必要ですし、受け取るこちらも私以外全員金沢大学の関係者、つまり教育者です。このような立場のおとなが対応に困るような、眉をひそめるようなものは書かないでください。別のところに出してください。

R18という言葉があるとおり、高校生は未成年で保護者の監督下にあります。反社会的な内容や道徳的に問題がある内容は好ましくありません。

念のためにもうしますが、これは一般的な文学にはない、ここだけの規範です。文学はそもそもなんでもありで、アウトローなものですし、クリエイターはしばしばアウトサイダーです。顰蹙を買うのをおそれていたのでは仕事になりません。しかしここでは、この賞は、特別だと理解してください。

性的な問題の取り扱いは慎重にお願いします。

差別やハラスメントにも気をつけてください。

時代劇、歴史劇、ＳＦなど、あまりにモノを知らなすぎる状態で書かないこと。
これらのジャンル小説には伝統があり、それぞれの美学があります。あまたの先達の素晴らしい作品群の蓄積があります。選者はそれらをある程度は読んでいますし、ひょっとすると心から愛しています。たいせつに思っているものを、にわかファンが乱暴にルール無視の乱闘でギタギタにしやがっていたら、ひどいと怒るのあたりまえでしょう？
手におえる題材にしてください。いまのあなたに無理なくとりあつかえるものに。
背伸びや無知、半可通は痛々しいのでやめてください。

小説はフィクションで、虚構で架空で夢で、つまり嘘です。
本来は、どんな場面だろうと、キャラだろうと、好きに書いていいのです。
誰にも見せないなら。
誰かに伝えたいなら、客観的になってください。
まず審査員を、それから、あなたの作品を目にするかもしれないありとあらゆるひとを、想定してください。どんな境遇で年齢層でもありうるあったこともない一生たぶんあわない他人さまたちが、あなたの読者です。
読者は書かれたものが嘘だとわかっています。それでも気持ちよくだまされたくて読むのです。設定や語り口に整合性や説得力がないと、嘘の皮がやぶれます。読んでガッカリします。だから、やぶれない、手におえる範囲で、書いて欲しいのです。

手品で考えてみてください。ホワイトタイガーを消すとか、縛られた海底から脱出するとかの派手で大きなイリュージョンをしかけるには、それなりの経験や才能や研鑽や予算とかアシスタントとかいろんなものが必要です。どんな手品師だって、まずは地道に、謙虚に、小さなコインやトランプを出したり隠したり自由自在にできるよう指の鍛錬をするところからはじめます。

つまり、高校生のみなさんは、よほど早熟な天才でないかぎり、この現実世界で自分が実際に経験したこと観察したこと感じたことなどなどから、あまり大きく飛躍していないものを題材にしたほうが無難なはずだということです。

悪魔崇拝とか、最終戦争とか、「厨二」な題材を書いてくださってももちろんかまいませんが、ハードルはそうとう高いと思ってください。こういう題材でいまさら独自性を発揮するのはかなり無理です。需要が高く、投稿サイト、深夜アニメ、コミケなどなどに既成作品がもう山ほどありますから。最近のものや有名なものにちょっと刺激されたぐらいでなんとかなるものではありません。しかも小説には最初、萌え絵もなければ有名声優のイケボもつかないんだよ？

世の中で人気が高いのはビジュアルです。

ＳＮＳ、インスタグラム、ＹｏｕＴｕｂｅ、ＬＩＮＥなど、瞬時に味わえます。楽しくて、暇はつぶれるし、誰かとコミュニケーションできるし、時代に遅れずについてってる感じもあじわえます。しかしなにしろ忙しい。次々に新しいコンテンツが現れ、盛り上がって拡散して消えていきます。なま

じ流行ると、すたれた時の「レトロ感」が半端ないです。ちょっと古いものはダサくてみすぼらしくてありえない。そんなものをいつまでも大事がってるとざんねんなひとになってしまう。消費スピードはとてもはやく、めまぐるしいくらいです。

小説もそういう消費に巻き込まれていますが、それでも、本を一冊読むにはけっこう時間がかかるし、読者側の知性や経験を必要とします。脳を能動的に使わなくてはならない。ビジュアル刺激や音楽やアミューズメントパークのライドのように受動的に面白がれるものではない。読んで理解し、味わい、咀嚼しなくてはならない。

だからこそ。

あらすじではなく、シーンを描くようにこころがけてください。

どういう言葉でどんな順序で語るかを工夫してください。

それが「読みどころ」です。

写生で風景画を描くようなものです。けしきは目の前にありますよね。どこをどんな構図に切り取るか、どんな線で、どんな色で書くかがひとりひとりのアートです。

ただし、小説のばあい、つかえるのは言葉だけ。言葉とそのならべかた、漢字やかなの配分、行かえや段落かえ。書かれたものと、書かずにわざと省いて「間」や空白を感じさせるものだけ。そこに、

じぶんらしさを発揮してください。

日常のなにげない場面でかまいません。

言葉のちからでとどめてみてください。

けっこう難しいでしょう？

でも、うまくいけば、その瞬間は永遠にとっておくことができるものになります。なんどでもあじわえるものになります。コンテンツは不滅なので。

あなたの過ごしてきた日々に、そしていま直面している問題に、うまく言えずに抱えていた気持ちに、きっと、言葉にしてとどめておく価値のある何かが、みつかるはずです。それはあなたが拾って磨いてきれいにしてくれれば、遠くまでとどけることができるものになります。あなたから失われるのでなく、あなたのものでありながら、みんなのものになるのです。私たち選者にも、ほかの誰かにも、「ああ、これ、素敵だね」とか「なんだかせつないね」とか、「わかるー！」とかいってもらえるようになる何かなのです。

わたしたちはそういうものを待っていますから。

なお、入選以上の作品についての久美選者の個別講評は、次のウェブサイトでご覧いただけます。
https://www.kanazawa-u.ac.jp/contest/chozen

最優秀賞　『ガーベラ』

ありがちでべたな話なのですが、うまいです。よくできてます。

導入部の会話とその配置、自然です。天才です。

筆をつかいなれたひとがリラックスして無心で天真爛漫に堂々と描いた楷書のかきぞめのようです。雪道運転になれたひとのハンドルさばきのようです。無理も無駄もなく、理にかなっていて美しい。

過去の事故のところ、美雪の両親も車を運転していたという説明があったほうがいいかな。あと大宮先輩がちょっと便利キャラすぎ、ナレーターすぎかな。直したほうがいいかもなと思ったのはそれくらいで、他のどこにも無理がない。

作者は、読者になにをどういう順序で伝えるべきなのか、よくわかっています。スポーツができるひとが初めての競技でも最初から正しいフォームがとれるような意味で、このかたは生まれながらの書き手です。

ぜんたい、長編小説、あるいは朝ドラの第一回みたいではあります。ほんとうに、ここからはじまる。でも、みずみずしくって、可愛らしくて、とても好印象でした。

恥ずかしいほどストレートで、素直で、明るくていじらしい。

高校生のための賞の第一回のてっぺんにふさわしいのはきっとこれだなあと思いました。

優秀作　グッドバイ、セイショウネン

おさない恋心に苦しむおとめの内省と選択。いいですねえ、青春です。しかし…うーん。好きとい

う感情に温度がないというか、あまりに色気がない。観念的すぎる。
強い違和感があったのはたぶん、主人公がまったくセックスについてふれないからだと思います。この年代の男女が恋愛関係にあるのに性的なことが「ないもの」扱いされている。じゃあ、つきあうとかわかれるってなに？　デートして、ちょっと手をつなぐとか、そういうこと？
主人公はどうやら成績がよく母親とも良い関係の「問題のない子」のようだから、高校三年生ではセックスしたいと思っていなくてそれでふつうだ当然だと思ってるのかもしれないけど、カレシはどうかなあ。思春期男子は性欲と性的好奇心の絶頂期でしょうに。オタクだろうと優しかろうと、どれだけ相手の子を好きだろうと、あるいは好きなら好きなほどに、「つきあって」いたら、何かはしたくなるものではないだろうか。せめてキスとか。手つなぐとか。それだけでドキドキのマンガ『一週間フレンド』みたいなモジモジくんたちなのか？　カノジョがオクテすぎて真面目すぎてほんとうは出したい手がだせなくて悶え苦しんでるのか。そこらへんにあまりになにも書いてなさすぎるんですよ。だからラブストーリーになってない。ぜんぜんキュンキュンしない。
では、思春期セイショウネンの性欲全開小説が読みたかったのかというと、すまんがそうではないというのは総評に書いたとおりです。18禁ということばもあるので、親の目をぬすんでやるようなことは書かないでいただきたい。それでも、甘酸っぱいものは書けるはずだ。生物的にはじゅうぶん繁殖可能なのに、まじめで良い子はそういうことができない、しちゃダメな気がする、この不自然を逆手にとって、したいけれどブレーキかけてる感が書けたらよかったんだが。そのほうがエロいか。
そんなこんなで、この作品には本当に困ったのです。主人公がかまととすぎるし、カレシを神格化

しすぎているし、母親は理解がありすぎる。世界中が主役に都合よく配置されてるのに観念的に悲劇のヒロインになっている。というところが、ものすごくエゴイストで、失礼で、実にリアルに「賢い」女子高校生らしくて、もう四十年も昔に女子高生だった私まで身に覚えとあまりの申しわけなさ恥ずかしさでいたたまれなくて悶絶した。うん、この点を極められていたらA評価だったと思う。

「ねぇ、ちょっと泳いでみない」からはじめて、プールを中心に描くべきだった。水の中にとじこめられていることが、ハイティーンの幼い自我につつまれていることのメタファーになる。そこからはなにもかもが歪んでみえるはずだ。学校も家庭も世界も。でもいつか息をしに出なくてはならない。おお。これ書けばみごとに文学でした。

とにかくきみはいらんものを書きすぎ。つめこみすぎ。説明しすぎ。「なにがどうしてどうなったか」自己分析的にいちいちまとめてるんだけど、それがザックリすぎて、あらすじを読まされてる気分になります。もったいないです。

些細な喧嘩の度に、そのすれ違いをなあなあで済ませて、「嫌わないで」と縋っていたのは私だ。

こういうのがあちこちにやたらあるんだけど、これはただの説明、しかも、自虐、自己韜晦。気分はつたわるけど凡庸すぎるし共感も同情もできない。盛り上がらない。きみの頭の中から出て、実態のある会話と表情と動作のあるシーンをうんでつくって観察して書け。

やってみます。

「ね。それ、その服だけど」
「え」
靴をはきかけたところで呼び止められた。下くちびるをでっぱらせて前髪を噴き上げるのは、彼が不機嫌になりかかってるときの癖。
「え、なに？　ダメかな？　なんで？」
「んーマジそれはないよ。あるじゃん、もっと可愛いの」
急げって言われたから、急いだのに…スヌーピーはこどもっぽかったかな。
〈またダメだしだ〉。
チラッと思う。彼はじぶんの感性にあわないものを許さない。すごく嫌う。ばかにする。ときどき、なんでも合わせてご機嫌そこねないようにしようとしてる自分を感じていやになる。あたしは彼にほんとの自分をみせてないのかも…。
「着換えておいでよ。待ってるから」
見えた。彼、着てる。スタジャンの下に、なんとかいう大好きなブランドのシャツ。色違いペアを私にくれた。頬がカッとなる。プレゼントをもらったことは嬉しい。けど、地元でお揃いとか無理だよ。おまけに、気味の悪い血だらけのテディベア柄なんて。
きみのイメージしたカップルらしくなかったらごめんね。
小説は説明文じゃないのさ。書かないことを読ませるもの。「優しいけど勝手で子供っぽくて女心に

まるで鈍感な彼」とかそういう説明をするかわりに、どんなことをしてどんなことをいうとそういうキャラにみえるか、読者がそう感じるかを予測して演出して書くのです。

優秀作　「世界の合言葉は 愛」

いきなりべんとうを捨てるシーンからはじまるのは「なぜ？」「なんだこれ？」と思わせて良いのだが。きみも、書かなくていいことをくどくど書いてスピード感をにぶらせてしまっている。冒頭、トイレ出てからの〝愛生の「日課」は〟からはじまる段落まるまる不要。これ抜いてハンカチで手をうんぬんにつづくほうがいい。いまべんとう捨てたへんな子が、その異様な動作から間をおかずにポニーテールに駆け寄って抱きつくほうがずっと怖いしへんだし読み手をひきこむ。

15秒のコマーシャルつくるくらいの気持で、いらんとこどんどんはぶいてカット割り多用してみてください。濃密になります。

さていったいこの物語はどこに行くんだろうと思ったら、レイという便利キャラが出てきて、親切に導いて解決してくれてしまったなあ。これまた主人公に都合がよすぎるキャラにたよりすぎ。ベクトルがまっすぐすぎる。家庭風景も恣意的に書きすぎ。再婚とかなにか訳ありなのかと読めて「？」と思ってると、二年前からずっとこうだの説明にはいってしまってしかも文章がひどい。

愛生の持ち前の明るさは家の中で影をひそめ始め、どんどん無口になっていった。

「、」でつないだら、「、」あとの文の省略された主語は「、」前と同一でないとおかしい。愛生の持ち前の明るさが主語なので、後半、明るさが無口になる、みたいに読める。へんです。あらっぽいです。たまにはしかたないんですが、なるべく気を付けて。「、」でつなぐの無理なときは、言い回しをかえるか、むしろ「。」でくぎること。

ネタは悪くない。もうすこし練って、レイとの関係も、都合よく便利になりすぎないように、レイにはレイの長所も短所も生活もあるように書くこと。おかあさんともめんどくさがらずにコミュニケーションしなされ。黙ってたこと言えなかったことをいって、ショックうけてもらって、叱られて、失望されて、口きいてもらえなくなって、トマトかれそうになって、畑の手入れして、カエルとかナメクジとかなんかイヤなものに出会ってがまんしてがんばってやっつけて乗り越えてつぐないをして、それから許されないと。ほんとうの成長にならないよ。